

## アユのボケ病(異型細胞性鰓病)治療マニュアルが出来ました

1990年代から、養殖場においてアユが突然に大量死する例が発生が見られるようになり、死亡にいたる前に魚の泳ぎ方が不活発となり”ボー”としているように見えることから、通称“ボケ病”と呼ばれてきました。この病気は、死亡した魚のえらに異常が見られることが特徴です。

この病気が全国的な問題になってきたことから農林水産省の委託を受け、栃木県水産試験場、東京海洋大学、日本獣医生命科学大学の3者が協力して、原因究明や被害軽減対策に取り組みました。日本獣医生命科学大学ではボケ病にはウイルスが原因の「異型細胞型」、細菌が原因の「細菌性鰓病型」、その両者から起こる「混合感染型」の3タイプがあることを明らかにしました。東京海洋大学では、このウイルスがポックスウイルス科に分類されることを明らかにして診断方法を確立しました。

栃木県水産試験場では治療方法について担当し、「細菌性鰓病型」の場合、塩分 1.0～1.2%で2～4時間の塩水浴を行うことで容易に治療できることがわかりました。しかし、「異型細胞型」と「混合感染型」では塩水浴の効果にバラツキがあることから、さらに養魚場での塩水浴の事例調査や試験場の池を使って塩水浴の試験を行いました。その結果、過度の運動負荷をさけて十分な餌止めを行った後に、0.5～0.9%濃度で塩水浴を12時間実施、高水温時期は1.2～1.3%塩水浴を2～4時間実施することが有効であることがわかりました。

以上の結果をもとに治療診断マニュアルを作成し、病名も異型細胞性鰓病 (Atypical Cellular Gill Disease: ACGDと略記)となりました。

